

# 宗教実践にみるインド洋津波災害

——タイ南部ムスリム村落における津波災害とグローバル化の一断面

小河久志

## I はじめに

本稿の目的は、タイ南部アンダマン海沿岸のインド洋津波被災地におけるムスリム住民<sup>\*1</sup>の宗教実践を通して、被災者である彼らが津波災害をいかなるものとして捉えているのか、その様態を明らかにすることである。

二〇〇四年一月二十六日にインド洋沿岸を襲った津波は、タイにも未曾有の人的、物的被害をもたらした（特集二「特集にあたって」参照）。津波後、被災地では、タイ政府をはじめ国内外のNGO団体や民間企業などからさまざまなかたちの支援、援助がなされた。しかし、その中身や実施過程をくわしく見ると、必ずしも被災地が置かれた状

況に適ったものとはいえず、各地で支援をめぐる不和や復興の遅れといった問題を生んでいる。

タイにおけるインド洋津波災害を扱った社会科学分野の研究は、こうした状況を受けて主に被災地の政治・経済の変化に注目してきた。ここではたとえば、津波による地域経済の衰退や復興支援をめぐるポリティクスといった問題が取り上げられ、被害の実態の把握とその分析を通じた改善策の検討がなされてきた。

しかし、被災地における政治・経済の変化は、あくまで津波災害の一部にすぎない。災害人類学者のオリヴァー・スミスが災害を「環境・社会・経済・政治・生物などの状態に影響を与えるものである」（オリヴァー・スミス 二〇〇六・二九）と述べるように、インド洋津波災害の影響もまた多様な次元、領域に及び、かつ長期化したのである。

以上を受けて本稿では、既存のタイ地域研究や災害研究ではあまり注目されてこなかった宗教・信仰の領域から、タイ南部アンダマン海沿岸におけるインド洋津波災害の相貌を描き出す<sup>\*2</sup>。そこにおいて津波災害は、津波が襲来する以前の状況を含めた長期的な過程として捉えられる。また、本稿は、被災地におけるミクロな宗教実践に焦点を当てて、その様態を詳細に検討すると、そこにグローバルに展開する宗教復興運動が密接に関わっていることが明らかになった。つまり本稿は、タイ南部アンダマン海沿岸のインド洋津波被災地における津波災害の多様なありようの一端を描き出すのと同時に、グローバル化の様相を明らかにする試みでもある。

以下、Ⅱ節では、筆者が調査を行ったタイ南部トラン県のムスリム村落M村<sup>\*3</sup>を事例に、同地における津波被害の概要を、復興支援との関係をふまえて描く。Ⅲ節では、津波により甚大な被害を受けた結果、村人の宗教実践がいかに変わったのか、その変化の様態を津波前の状況との比較を通して明らかにする。また、ここでは、津波前から村に伸展していたトランスナショナルなイスラーム復興運動の動きが考慮される。続くⅣ節では、津波の後に見られるようになったアッラーへの願掛けと新たな護符の誕生、普及という宗教現象を取り上げ、それをめぐる村人の多様な解釈を検討する。最後のⅤ節では、これまでに見てきた事例を

もとに、宗教の側面から村人の津波像を考察する。また、津波を契機に鮮明になった宗教をめぐるグローバル化の様相を描き出す。なお、本稿のもとになるデータは、二〇〇四年三月～二〇〇六年七月、二〇〇七年三月のタイ滞在中にM村を中心に行ったフィールド調査で得られたものである<sup>\*4</sup>。

## Ⅱ M村における津波被害と社会変化

本節では、タイ南部トラン県のムスリム村落M村における津波被害の状況と、復興支援をめぐる問題、ならびにそれが村落経済に及ぼした影響について明らかにする<sup>\*5</sup>。まずは、村の概況について見ていきたい。

### 1 M村

M村は、タイの首都バンコクから南に約八六〇キロ離れたトラン県に位置している。筆者の調査では、津波襲来前の時点(二〇〇四年二月)における村の世帯数は一九五世帯、人口は約一〇〇〇人で、そのすべてがムスリムであった。村は周囲を海と運河、マングローブ林に囲まれており、島の様相を呈している。実際、一九九六年に村と隣

のT村を結ぶ道路が開通する前は、船が村外に出る唯一の交通手段であった。また、電気が引かれたのも同じく一九六六年と他の村に比べて遅かった。

村では、耕地となる土地がわずかなため、村人の大半が小規模な沿岸漁業に従事していた。漁具は、主に乾季（二月～五月）にイカ籠（*sai pla muk*）<sup>6</sup>、雨季（六月～十一月）にキス網（*uan pla sai*）やガザミ網（*uan pu na*）が用いられていた。また、村の富裕層を中心に網生け簀を用いたハタ（*pla kao*）やアカメ（*pla krapon khao*）の養殖が行われていた。一般に漁業従事者（以下、漁民）の収入は、漁獲量の減少や原油価格の高騰などにもなう操業コストの上昇により、農業がさかな近隣の村の住民よりも少なかった。

## 2 津波被害と復興支援をめぐる問題

インド洋津波は、タイではM村の位置するトラン県を含む南部アンダマン海沿岸の六県を襲った。アジア災害準備センターの資料によると、トラン県は、死者六名、負傷者一二名という人的被害とともに、建物の全壊三四棟、半壊一五六棟、ならびに県民総生産の六パーセントにあたる二四億一二〇万バーツ（約七二億三六〇〇万円）の経済被害を受けた（Asian Disaster Preparedness Center 2006:

21）。筆者の調査によると、M村では死者一名、負傷者一名の人的被害とともに、建物の損壊一七棟、漁船の喪失二隻、破損八〇隻、漁船用エンジンの喪失八機、破損六五機、養殖用網生け簀の破損七九台の物的被害が生じた。漁網を中心とする漁具は、一〇八もの世帯が津波により紛失している。

津波後、M村では、政府やNGO団体など国内外のさまざまな組織や機関が支援を行った。しかし、そこには多くの問題が存在した。まず指摘できるのは、支援の規模や内容が村の被害状況に適っていなかったことである。たとえば、政府が行った被災漁船とエンジンへの補償金の支給。村で一般に使われる小型漁船（新品）の価格は、エンジンを含めて一隻あたり四万から六万バーツほどする。しかし、水産局が支給した補償金は、最高でも三万バーツにすぎなかった。王室による魚網の無償配布にいたっては、漁業に従事していない世帯にまで行われた。また、漁具や操業資金などを前貸しすることで漁民の生活を支えてきた海産物仲買人（*thraokae*）は、漁民と同様に津波の被害を受けたにもかかわらず、支援の対象とはならなかった。

支援の支給をめぐることは、各種機関への支援の要請、申請、分配に主導的な役割を果たす村長（*phu yai ban*）が不正を働いた。彼は、自身が持つ職権や行政とのコネクションを用いて、支援を自身の親戚（*yai*）や子飼いの村

人 (ruk non) にのみ行きわたるよう画策し、また自身もその一部を着服したのである。先に触れた被災漁船とエンジンの補償金を見ると、それを受給できたのは、被害を受けた一〇〇を超える世帯のうちわずか二六世帯だけであった。加えてこの二六世帯は、すべて村長の親戚か子飼いの村人であり、彼らのなかには実際の被害額よりも高額の補償金を受給した者や被害のまったくなかった者、漁業を行っていない者が含まれていた。こうした村長主導の不正は、被災漁船の補償金をはじめとする高額な支援の現場で顕著に見られた。

以上のような津波被害と復興支援をめぐる問題は、村の基幹産業である沿岸漁業を衰退させる一因となった。<sup>\*</sup> 村の漁民の多くは津波により壊滅的な被害を受けたが、その後もさらなる漁獲量の減少や海産物価格の暴落、造船ブームに伴う木材価格の高騰に見舞われるなど、彼らを取り巻く状況は悪化した。加えて、被災した漁民は、先述した被災漁船の補償金をはじめとする漁業関係の支援を十分に受けることができなかった。津波後、海産物仲買人が厳しい経営環境に置かれたことも無視できない。彼らは、買いつけた海産物が腐敗したり、契約漁民が長期間休漁したこと、貸付資金が焦げついたりするなどの被害を受けた。村に住む漁民の大半は、融資の担保となる貯蓄や財産を持たない零細な漁民である。その彼らに、これまで融資をしてきた

唯一の存在が、海産物仲買人であった。つまり、村の漁民が漁業を続けるためには、海産物仲買人の存在が不可欠といつても過言ではない。しかし、その彼らも、上述のように、政府やNGO団体から支援を受けられず、長期間の休業に追い込まれた。こうして、多くの被災漁民は、漁業の再開が困難な状況に置かれた。その結果、彼らは、一般に沿岸漁業よりも収入の少ない遠洋漁業や観光業に転職することを余儀なくされたのである。

### Ⅲ 宗教実践の変化

インド洋津波は、M村において、前節で見た経済のみならず、宗教の領域にも変化を生んだ。本節では、インド洋津波が襲来する前と後の村人の宗教実践を取り上げて比較することで、その通時的な変化の様態を明らかにする。まずは、津波前の状況について見ていきたい。

#### 1 津波前

(1) イスラーム復興運動タプリーゲ

津波前のM村では、タプリーギー・ジャマーアト

(Tablighi Jama'at 以下、タブリーグ) というトランスナショナルなネットワークをもつイスラーム復興運動・団体が多くの賛同者を獲得し、来世指向の強いその教えを「正しいイスラーム (itsalam thae)」として村人に広めていた。タブリーグは、一九二七年にスナ派の一法学派であるデオバンド派のイスラーム学者マウラーナー・ムハンマド・イリヤースにより北インドのメワートで始められた。そこでは、預言者ムハンマドの送った生活様式がムスリムの理想とされ、信仰告白、礼拝、宗教知識の習得とアッラーを想起すること、同胞愛、アッラーに誠実であること、宣教のための時間をつくること、の六つの事柄の実践が重視される (Ali 2003: 175-177)。

タブリーグの活動で中心となるのが、超俗的な宣教である。宣教では、一〇人前後の男性信者から構成される宣教団 (jama'at) が活動の基本単位となる。そこにおいて参加者は、月三日間、年四〇日間、生涯四カ月間などの決められた期間、居住地の内外で宣教活動に従事することが求められる。具体的には、宣教先のモスクを拠点に、集団礼拝、宗教講話、聖典クルアーンやタブリーグの教本であるタブリーギー・ニサーブ (tablighi nisab) を用いたイスラーム学習、ならびにそれらへの住民の勧誘などが行われる。これら一連の活動を通して、参加者は、上述した六つの事柄を実践するとともに、それらが持つ宗教的な意味に

ついて学ぶことになる。このようにイスラームの実践 (aman) に励むことで、彼らは信仰心 (iman) を強化していく。そして最終的には、最後の審判の後の天国行きが目指されるのである。現在、タブリーグは、デリーにある総本部を中心に、タイを含む八〇を超える国で活動を展開している (Masud 2000: vii)。

タブリーグがタイで活動を開始するのは、北部ターク県のメーソット郡に住むハッジ・ユースフ・カーンが同地で宣教を始めた一九六六年とされる (Sawani 1988: 239)。その後、タブリーグは、タイ政府の寛容な姿勢や一九八〇年代以降の国内経済の発展などを背景に参加者を増やし、活動地域も全国へと拡大した。こうしてタブリーグは、現代タイにおいて最大の規模と影響力を誇るイスラーム復興運動となったのである。

## (2) M村におけるタブリーグの伸展<sup>34</sup>

M村に初めてタブリーグの宣教団がやって来たのは一九七八年のことである。一九八二年には当時、村のイマーム (imam) 礼拝時の導師で村における宗教指導者の一人 (とイスラーム教師 (to khru) を兼任していた A・P氏 (男性)) が、深南部のパッターニー県から来村した宣教団の誘いを受けて、村で初めて村外で行われる宣教に参加した。タブリーグの活動を高く評価した彼は、それ以降、宗教指導者

としての立場を利用して、金曜日の日に行われる集団礼拝（以下、金曜日礼拝<sup>\*10</sup>）など多くの村人が集まる場での説教や戸別訪問を通して村人に宣教活動への参加を促した。そこにおいてA・P氏は主に、①現世の短さと来世の永続性、②来世における天国の素晴らしさと地獄の恐ろしさ、③現世は来世のための準備期間であり、それゆえ現世においてムスリムは強固な信仰心を持ってイスラームの実践に専心しなければならぬこと、④タブリーグの宣教活動は日常的な宗教実践よりも多くの功德（Dhū）が得られること<sup>\*11</sup>を説いた。この彼の説教において現世の諸事は、アッラーが決めるものであり、人間には変えることができないものである点も強調された（A・P氏談）。こうしたA・P氏の活動は、まず村における宗教活動全般を監督、支援する当時のマスジッド・イスラーム委員会（Khanakamnakan i-salam pracam matsayit<sup>\*12</sup>以下、モスク委員会）の委員（以下、モスク委員。A・P氏もその一人）の多くを取り込むことに成功した。モスク委員は、村人から選挙で選ばれ宗教局に登録される村の公的な宗教指導者である。村人は、「彼らには威光（barām）がある」とし、畏敬の念をこめて彼らを「スラオ・グループ（do srao）」<sup>\*14</sup>と呼んでいた。そのモスク委員が、自身を持つ宗教的威光を背に精力的に村人を宣教したのである。こうして次第にタブリーグの活動に関心を持つ村人の数は増え、なかには定期的に宣教活

動に参加する者も現れた。

この動きは、一九九〇年代に入ると加速化する。背景には、村におけるインフラの整備やタブリーグとモスク委員会の連携の強化、イスラーム教育の拡充といった変化があった。まず、一九九六年に村と隣のT村を結ぶ道路と電気が開通すると、タブリーグの宣教団が村を訪れる回数が増えていった<sup>\*15</sup>。また、インフラが整備されることで、村の基幹産業である沿岸漁業に従事する村人が、市場にアクセスすることが容易になった。以前は対岸のJ村に住む仲買人一人に限られていた水揚げの販路は増え、それに伴い水揚げの売値は上昇した。その結果、村人の収入は増加し、宣教活動に参加できるだけの経済的、時間的な余裕が彼らの間に生まれることになった。

一九九〇年代はまた、村のモスク委員会が、タブリーグとの連携を強めた時期でもあった。村には、タブリーグの活動を管理、運営する村人から構成される運営委員会（Khanakamnakan borihan）が置かれている。前出のA・P氏によると、この時期には一五名いたモスク委員全員が、この運営委員を兼任するなど村におけるタブリーグの中心メンバーになっていたという。彼らに共通していたのは、タブリーグが説くイスラームを「正しいイスラーム」と見なしていることであった。彼らは、この「正しいイスラーム」を村人の間に広めるべく、モスク委員会のなか



に、それを実践する宣教団の受け入れを担当する委員 (tong rap 二名) などタブリーグの活動を支援、推進する役職を新たに設置した。また、彼らは、先述したA・P氏の語りを用いつつ、新たにタブリーグの六つの基本簡条と月三日間の宣教を「成人男性の義務 (nathu)」として、それらを行うよう村人に訴えた。<sup>\*16</sup>

加えてモスク委員会は、村におけるイスラーム教育の拡充に取り組んだ。一九八〇年代以前のM村には、クルアーンの朗唱を目的とする私塾(クルアーン塾)しかなく、A・P氏によると当時の村人のイスラーム知識の種類や量は乏しかった。こうしたなかモスク委員会は、村で最大の規模を誇るA・P氏のクルアーン塾を拡張するかたちで一九九〇年にモスク付設のイスラーム教室(以下、モスク宗教教室)を開設した。二〇〇〇年には、村の内外的からの支援を受けて全国規模でイスラームの基礎教育の普及を進めるクルサンパン協会 (samakhom khurusamphan) <sup>\*17</sup>への加盟を果たした。加盟校は、クルサンパン協会が作成した全国統一のカリキュラムと教科書を使用することができる。これにより村のモスク宗教教室は、A・P氏を含む三名のモスク委員を教師に、イスラームに関する幅広い知識を体系的に教授できるようになった(小河二〇〇九)。

村のモスク委員会は、タブリーグが説くイスラームが正しいイスラームとの認識に基づき、モスク宗教教室の授業

にタブリーグの宣教活動を導入してもいる。たとえば、タブリーグが毎週木曜日のマグリブ礼拝(日没の礼拝)の時間以降にモスクで行う集団礼拝と説教に、モスク宗教教室の生徒を参加させている。また、モスク宗教教室の教師は、教室で定期的に開いている子弟の保護者との面談において、彼らを積極的にタブリーグの活動に勧誘した。こうしたイスラーム教育をめぐる一連の動きは、イスラームの基本知識の獲得とともに、タブリーグに対する村人の理解と関心を促し、その賛同者を増やす一因となったのである。

以上の背景のもと、M村においてタブリーグは、「正しいイスラーム」を教え広める運動として次第に宗教的な正当性を獲得していった。そのことは、タブリーグの活動資金として一世帯あたり月に一〇〇バーツの喜捨が義務化<sup>\*18</sup>され、かつ対象となるほほすべての世帯がそれに応じていることから理解できる。また、参加の程度に差はあるものの、村に住む既婚男性の大半が、タブリーグの宣教活動に参加した経験を持つまでになった。<sup>\*19</sup>その様子は、県内のタブリーグの活動を統括するトラン県支部 (markat trang) に評価され、M村は一九九六年に村支部 (mahana) <sup>\*20</sup>、一九九八年には近隣の六つの村を統括する地区支部 (hanko) に指定された。<sup>\*21</sup>

このようにタブリーグが伸展する一方、それまで村に広

く見られた民間信仰は衰退した。民間信仰は、生活と密接に結びついた信仰観念や実践で、現世利己的な傾向が強く、呪術的な実践がしばしば重視される（三尾二〇〇四・一三六）。M村では、災厄除去をはじめとした現世利益の実現を目的に、漁の成功と安全を司る船霊（mae yanang）や祖霊（tayan）といった超自然的な存在が古くから信仰されてきた。ここでは、供物や呪文などの道具を用いた儀礼や供宴が、さまざま機会に行われていた。そうした信仰は「慣習（prapheni）」として、来世に関わる「宗教（satsana）」つまりイスラームとともに日常生活を営むうえで不可欠のものと考えられていたのである。しかし、タブリーグが村人からの支持を獲得していくなか、民間信仰は否定されるようになる。その理由は大きく二つあった。第一に、民間信仰が偶像崇拜的な要素を持つことである。それは、アッラー（anlo）の唯一性を犯す行為につながるとして否定された。第二は、その現世指向の強さである。先述のように現世をよりよい来世のための修練の場と捉えるタブリーグにとり、そうした傾向は忌避されるものであった。こうして、津波前のM村では、民間信仰を放棄する者やそれをタブリーグがいうところのイスラームの規範に則ったかたちに変えて実践する者が、村人の多数を占める状況にあった。<sup>\*21</sup>

## 2 津波後

インド洋津波は、上記のような宗教状況にあったM村を襲った。津波は、現象そのものに加え、それが直接、間接に引き起こした被害の規模においても村人の想像を超えたものであった。また、復興支援をめぐりⅡ節で見たようなさまざまな問題が起きたことも重なり、生活の再建は困難を極めた。こうしたなか、村人の間から、いったい津波は何が何のために引き起こしたのかという疑問が聞かれるようになった。また、いつ襲ってくるかわからない津波への恐怖とともに、自分たちの力ではいかんともしたがたい津波を何とかして防ぎたい、津波による被害を最小限に留めたいといった現世利益を希求する動きが現れた。以上のように津波後の物理的、心理的状況の変化は、次に見るように村人の宗教実践のありように変化を引き起こすことになったのである。

### （1）タブリーグの宣教活動の変化

まずは、タブリーグの宣教活動について見ていきたい。タブリーグの中心メンバーの村人は津波後、従来とは異なる内容、方法の宣教を始めた。彼らは、津波を不信仰者に対するアッラーからの罰（bara）であり警告（kham



man)であると解釈して、アッラーの恐ろしさと偉大さを強調した。そして、それを避けるためには、タブリーグの六つの基本簡条を実践するなどイスラームに敬虔になるしか術はないと考えた。こうして彼らは、金曜礼拝の後に行われる説教 (khutba) や村人宅の慰問 (khat) などの際に、上記のことを村人に説いた。そこには、津波前にはほとんど聞かれることのなかったイスラーム実践と現世利益の獲得とを結びつける語りがあった。たとえば、タブリーグの中心メンバーであり村のイマームでもあるB・P氏(男性)は、モスクで行われた津波後最初の金曜礼拝の説教で、参加者に対して以下のように語った。

〔前略〕何が津波を起こしたのか。それは地震だ(省略)。以下、段階を追って事象の原因が示される。最後に地球にたどりついた)。では、この地球は誰がつくったのか。それはアッラーだ。アッラーは、この世界にあるすべてのモノを創造し、そこに意味を与える。つまり、津波の主はアッラーなのだ。では、なぜアッラーは、津波を引き起こしたのか。それは、イスラームに不真面目なムスリムに罰を与えるためだ。みなさんは、ピーピー島(トラン県の北隣のクラビー県の沖にある国際的な観光地)がどれだけの被害を受けたか知っているでしょう。ここでは、観光客とともに多くのムスリムが亡く

なったり財産を失ったりした。それはなぜか。彼らは酒を飲み、礼拝をしないなどイスラームの教えに反する(pit lakkan satsana)生活を送ってきたからだ。私たちの村は、(タブリーグの)地区支部であり、タブリーグの活動に熱心な村だ。イスラームに敬虔な者が多かった。だからアッラーは、他の村よりも被害を少なくして下さったのだ。<sup>\*22</sup>津波がまた来るのか来ないのか、誰がどれだけの被害を受けるのかは、アッラーがお決めになることで、われわれにはわからない。しかし、これまで以上にアッラーを想起し(nuk thung anto)、イスラームに敬虔(khreng khirat satsana)になれば、アッラーは私たちを助けてくださるはずだ」(二〇〇五年一月七日。かつこ内は筆者による補足)

さらに、後日行われた金曜礼拝の説教では、スリランカの津波災害について記したピラが使われた(写真1)。イマームによると、その英語版がデリーにあるタブリーグの総本部からトラン県支部に送られ、そこでタイ語に翻訳されたものが手元に届いたという。ピラには、スリランカの東海岸を襲った津波の航空写真が付されており、①それがアラビア語のアッラーの文字に酷似し、かつ不信仰者の村が津波により壊滅的な被害を受けたことから、津波はアッラーがイスラームの教えに従わない不信仰者への罰として

起こしたものである、②生き残ったムスリムは悔い改めなければさらに大きな罰が下されるだろう、とするコロンボのイスラーム学者の見解が記してあった。<sup>24</sup> タブリーグの中心メンバーは、このビラを複製して金曜礼拝の参加者全員に配った。そして、それを用いて、アッラーの偉大さとともに、イスラームに敬虔であること、つまりタブリーグの

教えに従うことの必要性を村人に説いたのである。その後もビラは、慰問などを通して配られ、最終的には村に住むほぼすべての世帯がそれを保有することになった。こうした津波後のタブリーグの宣教活動は、津波前のそれと比較すると以下のような変化を指摘することができ。第一に、宣教に際してイスラームと現世利益の関係性

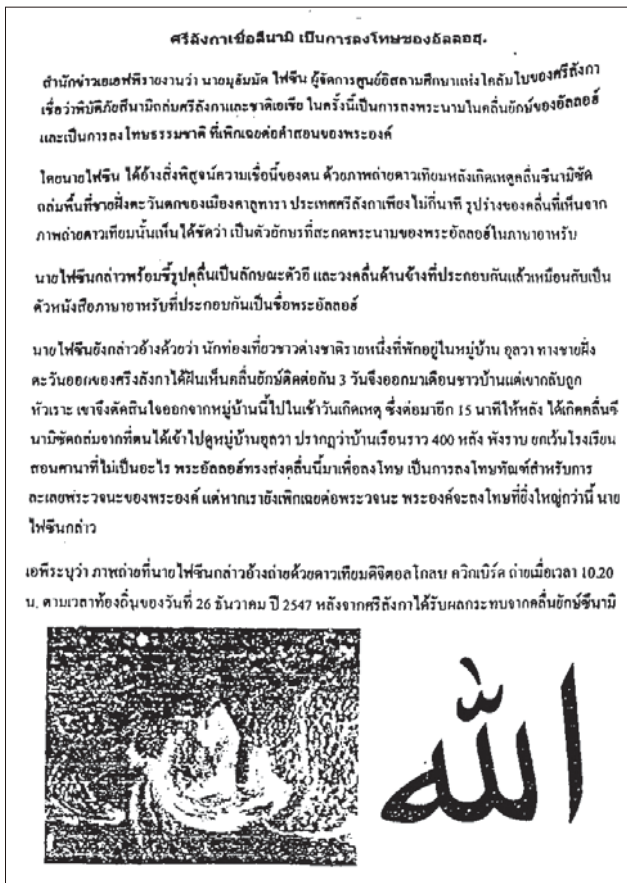


写真1 スリランカの津波災害に関するビラ（2005年 筆者撮影）

を強調したことである。確かにこれまでタブリーグの中心メンバーは、現世の諸事を決めることができるのはアッラーだけだと考えてきた。そのうえで、現世を来世のための修練の場と見なし、よりよい来世を目指してタブリーグの教えを含むイスラームの規範に従った生活を送ることを信者に求めてきた。このため、津波前の時点で、彼らが現世利益の獲得を目的とするイスラーム実践を許容するようなことは、筆者の知るかぎりではなかった。第二に、宣教に際してピラを用いたことである。タブリーグの特徴として指摘されるもののひとつに、本やパンフレットといった印刷物をほとんど作成しないことがある(中澤一九八八・八一)。管見ではタブリーグが作成した印刷物は、教本と「喜捨の意味を説くテキスト(Khush Kha sodko)」があるにすぎない。先の事例のように、M村においてタブリーグが、それらとは別の印刷物を作成し、宣教活動で使用するようなことは、津波前には見られなかった現象であった。

## (2) その他の宗教実践の変化

津波後の宗教実践の変化は、タブリーグの宣教活動だけに見られるものではなかった。たとえば、津波前にはまったく見られなかった現象が現れたり、ごく限られた村人の間でしか見られなかった現象が広まったりするなどした。ここでは、アッラーへの願掛け(Don)と新たな護符の出

現という二種類の宗教実践を取り上げ、その様態を明らかにする。<sup>\*25</sup>

まずは、アッラーへの願掛けについて見ていきたい。津波前のM村において願掛けは、祖霊(Ani)をはじめとする土着の超自然的存在を対象に、一部の村人によって行われてきた。その一方で、アッラーへの祈願(Allophone)は広く見られたものの、願掛けは筆者の知るかぎり行われていなかった。

このアッラーへの願掛けは、①モスクや自宅などでアッラーに叶えてほしい事柄とそれが実現した際のお礼の内容を伝える祈願と、②願が成就した(Yes Don)際のアッラーへのお礼の実施、から構成される。願の内容は主に、再び津波を起こさないでほしいというものであった。また、アッラーへのお礼は、供宴(Feast)を開催することでほぼ共通していた。たとえば、専業漁民のB・T氏(男性)は、「二〇〇五年三月一二日に再び津波が起きる」という噂<sup>\*26</sup>が村中に広まるなか、二〇〇五年三月四日に「三月一二日に津波を起こさないでほしい。願いを聞き入れてくれた暁にはお礼に鶏のカレーを奉げる」という内容の祈願をアッラーにした。そして、三月一二日に津波が起きなかったことを受けて、同月二五日の昼の礼拝の後に自宅で近親者を招いたお礼の供宴を行った。このB・T氏の事例もそうであったが、お礼の供宴では、クルアーンやハディース

由来の決まり文句であるドウアー (du'a) が唱えられた後、祈願の際にアッラーに約束した料理が参加者に振る舞われるのが一般的であった。ここでは、ドウアーを朗唱することで、供物がアッラーに届けられると考えられている。祈願者は、願が成就しなければ供宴をする必要はないが、成就した場合はいつでもよいが必ず供宴を行わなければならない。もし、供宴を催さなかったり、約束とは異なる内容の供物を用いたりすると、祈願者とその家族は病氣や事故などの罰をアッラーから受けるとされる。

次に見たいのが、新たな護符の出現という現象である。

確かに津波前のM村では、村外に住む呪医 (sho) がクルアーンの一節などを記した紙片や布片が護符として用いられてきた。それには、交通事故を防いだり、海に住む死霊 (du'jan) に憑かれることを防いだりするなど特定の効能があると考えられていた。しかし、護符の使用は、偶像崇拜や呪医への個人崇拜につながるとして、タブリーグの中心メンバーから否定的に捉えられた。このため、津波前の村において護符は、限られた村人のみで使用しており、またバイクの外装の内側や使用者の腰の部分など目につかない場所につけられていた。

しかし、津波の後に現れた護符は、それらの護符とはあらゆる面において性格を異にした。まず、護符として用いられたのは、呪医という特殊技能者が作成したものでな



写真2 ビラが貼られた家の戸口(2005年 筆者撮影)

く、タブリーグの中心メンバーが津波後に配った前出のビラであった。写真1を見るとわかるように、このビラには、スリランカの津波災害に関する記事に加えて、津波の衛星写真がアラビア語のアッラーの文字とともにつけられている。多くの村人は、アッラーの文字とそれに酷似した津波の航空写真があることから、このビラを神聖なもの (sing sakti) と見なした。<sup>\*28</sup> なかには、ビラに津波から村人を守る力があると解釈し、それを家の戸口に貼る者が現れた(写真2)。つまり、ビラが護符として用いられるようになったのである。その数は、二〇〇五年三月末の時点

で一二世帯にのぼった。<sup>\*28</sup>このように、人目につく場所で護符が使われること、ひとつの護符がこれほどまでの数の村人に普及したことは、津波前のM村ではなかった。

## IV 新たな宗教実践をめぐる村人の解釈

本節では、アッラーへの願掛けと新たな護符の誕生という津波後に生まれた宗教実践をめぐる村人の解釈を取り上げ検討する。

### 1 当人たちの解釈

まず見たいたいの、右記の宗教実践の主体となる村人の解釈である。彼らの語りによると、自身の行為はイスラーム的に「正しい」ものであるという。たとえば、津波後、漁業の休止を余儀なくされたA・C氏（男性）は、彼が護符と見なすピラとイスラームの関係性を次のように説明した。

「(ピラを指さして) ほら、ここにアッラーの名があるだろう。これに祈ればアッラーからの利益 (phon) が得られるんだ。私は毎日、祈っているよ。ただし、他の

(アッラー以外の) 存在 (sh. sh. nu) に祈るのは悪行 (sh. sh.) だ。なぜなら、それはアッラーを想起してないからだ。しかし、これは他の存在とは関係がないアッラーのもの、イスラームに則った (thuk. hsalam) ものだよ」(二〇〇五年七月二三日。かっこ内は筆者による補足)。

この語りでは、A・C氏がピラを護符として用いることの宗教的な正当性は、そこにアッラーを描定していることにある。同様の解釈は、アッラーへの願掛けにも見られるものであった。逆に、彼の解釈では、アッラー以外の存在を崇拜するという行為、たとえば、漁の安全や成功を祈願して船霊に願を掛ける行為などは、宗教上、問題のあるものになるのである。また、A・C氏もそうであったが、彼らの多くが、ピラを貼りそれに祈るという行為を、日常的にアッラーを想起しイスラームを実践していることと同義のものとして捉えている。それは、実践する者のアッラーに対する信仰の深さを表す行為として宗教的に評価されていた。

タブリーグの教えに従っていることもまた、彼らの行為の宗教的な正当性を保証する根拠のひとつとなった。先述のようにタブリーグの中心メンバーは、津波後に再開した宣教活動において、アッラーを常に想起するなど



イスラームに敬虔であれば、アッラーの加護により津波災害を防ぐことができると主張した。アッラーへの願掛けやビラを護符化する者は、自身の行為がアッラーを想起したものであり、それゆえに宗教上の正当性を持つタブリーグの教えに適ったものと認識していた。こうしてその行為は、イスラーム的に「正しい」と見なされたのである。

アッラーへの願掛けがイスラームの教えに反しないか問うた筆者に、「何も間違っていない。なぜなら、願成就の供宴 (nuri, kae bon) でアッラーに祈っているからだ。タブリーグのメンバー (bo dawa)<sup>\*30</sup> は、できるだけアッラーに祈るようにといていたが、私はそれに従っている」と答えた前出の B・T 氏の語りが、そのことを明確に示している。

## 2 タブリーグ中心メンバーの解釈

他方で、タブリーグの中心メンバーは、右記の宗教実践を否定的に捉えている。彼らは、アッラーに祈願することやアラビア語でアッラーと書かれたモノを大切に扱うことについては、イスラームの規範に則った行為と見なしていた。しかし、その一方で、願が成就した際にアッラーへの返礼として供宴を行うことや、アッラーを意味するアラビア語が書かれたビラを護符として用いることを、彼らは認

めなかった。前出のイマーム B・P 氏の説明によると、その理由は以下のようになる。まず、アッラーへの願掛けを否定する理由としては、「アッラーは料理をはじめとするいっさいの供物を受け取らない」ことをあげる。また、護符については、「いくらアッラーの名前が付されていてても、モノに現世を変ええる特別な力はない。それができるのは、アッラーだけである」ことを否定する際の根拠とした。加えて、これら二つの宗教実践は、ともに来世ではなく現世における利益の獲得を目指していることも、現世を来世のための修練の場と見なすタブリーグの中心メンバーにとっては認めがたいものであった。このように、タブリーグの中心メンバーは、彼らが言うところのイスラームの規範（それはタブリーグの教えとほぼ重なる）に反することから、アッラーへの願掛けとビラの護符化を宗教的に正しい行為とは見なしていなかったのである。

以上の事例からは、アッラーへの願掛けとビラの護符化という津波後に生まれた宗教現象をめぐる解釈に、それを行う村人とタブリーグの中心メンバーの間で埋めがたい相違が存在していたことがわかる<sup>\*31</sup>。その一方で、そうした行為の宗教的な正しさを決める基準のひとつとしてタブリーグの教えが用いられている点では、両者は共通していた。



## V 考察——結びにかえて

本稿の目的は、トラン県のムスリム村落M村を事例に、タイ南部アンダマン海沿岸におけるインド洋津波被災者の津波像と同地におけるグローバル化の様相を、彼らの宗教実践から明らかにすることであった。最後に、これまでに見てきた事例を通して、上記の点について考察する。

まず取り上げたいのは、村人が津波災害をいかなるものとして捉えていたのか、ということである。津波直後の金曜礼拝の説教でイマームが語っていたように、津波が起きた科学的な原因は地球にあった。そのことは、テレビや新聞といったメディアを通して、たちどころに村人の知るところとなった。本稿で取り上げた村人たちも、その例外ではなかった。しかし、彼らは、それには飽き足りず別の理由を探した。それが、宗教的な理由であった。つまり、村人は、津波災害をアッラーが不信仰者に与えた罰であり警告と捉えたのである。では、なぜ彼らはそのように解釈したのだろうか。おそらく、津波という自然現象やそれに伴う災害が、村人の理解や想像を超えたものだったことがあげられる。津波は、突如として村人の上に降りかかった新たな災厄であった。彼らは、この理解不能な出来事を、何

とかして解釈可能なモノにする、つまり自分たちの領域に馴化させることで、精神的な安定を獲得しなかったのではないか。こうして、科学 (scientific) よりも自分たちの日常に親和的な宗教に由来する原因が導き出され、広まっていったのだと考えられる。

村人の津波像の形成について考えるにあたり、無視できないのがタブリーグの存在である。これまでタブリーグは、モスク委員会やモスク宗教教室といった村の公的宗教機関と連携し、地道に宣教活動が続けてきた。<sup>33</sup> その結果、津波前のM村においてタブリーグは、多くの村人から宗教的な正当性を付与され、それが説くイスラームは「正しいイスラーム」と捉えられるようになった。このタブリーグが津波後、上述した津波解釈を提示し、アッラーの偉大さを強調した宣教を精力的に行った。そこにおいて彼らは、具体的な事例と航空写真のついたピラを用いることで、自身の津波像にリアリティを与えたのである。それは、宣教を目的とした津波のリソース化といえる行為でもあった。結果として、タブリーグの津波像は、タブリーグの支持者だけでなく、タブリーグから距離を置いてきた村人の間にも見られるようになった。その様子は、タブリーグが配布したピラの護符化という賛否両論ある宗教実践の出現に見てとることができる。タブリーグの津波像が広く根づいた要因には、先に見た当時の村人の心理的状况やアッラーに

対する畏敬の念の浸透とともに、宗教的な正当性をもつタブリグの存在があったのである。

以上の考察からは、M村におけるタブリグの影響力が津波後、増大したことがわかる。タブリグの存在がなければ、アッラーへの畏敬の念を基盤とする津波像がこれほどまで多くの村人に支持されることはなかったといえるだろう。それは、イスラーム世界の周縁に位置するM村が、津波を契機として、タブリグというグローバルに展開する宗教復興運動によりいっそう包摂されたことを示しているのである。加えて、その取り込まれ方は直接的であった。そのことを如実にあらわしているのが、タブリグが宣教で用いたピラである。先述のように、このピラは、タブリグが持つトランスナショナルなネットワークを通してインドから送られてきたのだが、そこに国家が介入することはなかった。この背景には、イスラーム復興運動に対するタイ政府の寛容な姿勢がある。タイにおいてタブリグは、政府による管理、統制からほとんど自由であり、時には支援さえ受けてきた。<sup>\*34</sup> こうした状況は、イスラーム復興運動を国家の枠内に収斂してきた近隣の被災国とは異なるものであった。

災害は、被災地の文化の様態に変化を引き起こすが、それがどのようなものなのか、そこにおいて災害がいかなる役割を果たすのか、知らなければならぬことはいまだ多

くある（オリヴァー・スミス&ホフマン 二〇〇六：一三二）。本稿は、インド洋津波の被災地であるタイ南部アンタマン海沿岸のムスリム村落を事例に、宗教・信仰の領域におけるそのひとつのありようを描き出す試みであった。

#### ●注

\*1 タイの全人口に占めるムスリムの割合は、調査機関や研究者により四〜一四パーセントと大きな開きがあるため正確な数値を定めるのは難しい（Omar 1999: 221-222）。ちなみに、宗教局（Krom Kansatsana）の二〇〇〇年度の統計では、全人口の約五・二パーセント、三三二万人ほどである（Krom Kansatsana 2000）。

\*2 インド洋津波と宗教・信仰の関係性を扱った研究は、管見では斎藤（二〇〇九）、杉本（二〇〇七）、Liang（2008）があるにすぎない。なかでも、タイを対象とした研究は皆無である。

\*3 タイの地方行政は、内務省支配のもと県（changwat）から郡（amphoe）、タムボン（tambon 複数の村から構成）、村（muban）にいたる階層構造を持つ。

\*4 調査は、二〇〇三年度国際交流基金アジア次世代リーダーフェローシップ・プログラム、二〇〇五年度庭野平和財団研究助成、二〇〇六年度企業家研究フォーラム研究助成、ならびに二〇〇六年度同志社大学一神教学際研究センターC O Eプログラム「一神教の学際的研究——文明の共存と安全保障の観点から」奨励研究費による支援とタイ国学術審査会議（National Research Council of Thailand）の許可を得て可

能となった。

\*5 本章の内容は、拙稿（小河二〇一〇）の一部を簡略化したものである。

\*6 本稿におけるタイ語のローマ字表記は、アヌマーンラーチャトン（Anuman Rajadon 1961）に従う。ただし、声調記号、グロツタル・ストップ、その他の特殊記号は省略した。

\*7 それは同時に、政治の領域にも変化を生んだ。村には津波後、村長支持派と反村長派という二つの派閥が誕生した。両派は、地方選挙の場で激しく対立した。

\*8 女性も宣教活動に参加できるが、村外で行われるものは配偶者が同伴しなければならないなど制約が多い。

\*9 村におけるタブリーグ仲展の歴史的過程とその社会経済的影響について、くわしくは拙稿（小河近刊）を参照のこと。

\*10 イスラームにおいて金曜日の昼に行われる集団礼拝への参加は、成人男性の義務とされる。

\*11 タイにおいて積德行は、一般に国民の約九割を占める上座部仏教徒の間で、現世と来世に幸福をもたらす善行とされる。この観念はムスリムにも見られる（e.g. Burr 1988, 西井二〇一〇）。

\*12 マスジットは、イスラームの礼拝所を意味するアラビア語のマスジド（masjid）に由来するタイ語である。タイでは、アラビア語やマレー語、ウルドゥー語、ペルシャ語などに起源を持つイスラーム関係の単語が、しばしばタイ語風に読まれて用いられている。

\*13 日本では、イスラームの礼拝所を指す単語としてモスクが一般的であることから、本稿ではモスクを用いる。

\*14 スラオはモスクと同義である。

\*15 村には、トラン県を中心とする国内全域、さらにはマレーシアや中国、サウジアラビア、オマーンといった海外からも宣教団が訪れている。

\*16 年四〇日間、生涯四ヶ月間の宣教は、多額の費用と時間を必要とするため義務とされなかった。

\*17 クルサンパン協会は、アラビア語やマレー語といった外国語で書かれた教科書を用いてイスラームを学んでいた子弟の負担軽減を目的に、一九五六年にバンコクで設立された（samakhom khurusamphan ウェブサイト）。

\*18 高齢者世帯や貧困世帯は対象から外された。

\*19 村人のなかにはタブリーグの教えや活動に批判的な者もいる。たとえば、クルアーン塾の教師であるM・Kh氏（男性）は、クルアーンのなかにタブリーグへの参加を義務づける記述がないことや、参加者とその家族に経済的、精神的に多くの負担を強いることなどを理由に、タブリーグを善行ではなく悪行（bad）と見なし、その活動にはいっさい参加しない。こうしたタブリーグをめぐる村人の多様な対応のあり方や相互関係については、機会を改めて論じたい。

\*20 当然のことながら、タイにおけるすべてのムスリム・コミュニティがタブリーグを受け入れているわけではない。民間信仰に代表される慣習を保持する者やイマームなどの宗教指導者、中東をはじめ海外での留学を終えて帰国した子弟らが、自分たちが「正しい」と認めるイスラームのありよう（これも多様だが）とは異なることを理由に、タブリーグを批判したり、拒絶したりするケースも見られる。なかには、

宗教指導者層の判断により、コミュニティ全体でタブリーグの受け入れを拒否するところもある。

\*21 津波前の民間信仰をめぐる村人の多様な解釈、実践の様態については、紙幅の都合上、本稿で取り扱うことはできない。くわしくは拙稿 (Gawwa 2008) を参照のこと。

\*22 この他にも、津波襲来時に南部のソングラー県から来村していたタブリーグの宣教団が、避難せずにモスクでアッラーに祈りを捧げたことも、他の村に比べて津波の被害が少なかった原因として宣教の際に言及された。

\*23 このビラに付された津波の航空写真も別途、村内に流通した。

\*24 ビラによると、情報の出所は、AFP通信が配信した記事であった。

\*25 この他にも、モスクで礼拝をする者やタブリーグの宣教活動に参加する者が増加するという現象が見られた。

\*26 噂の出所は、村近くの町に住む占い師 (mo du) の予言であった。

\*27 土着の超自然的存在に対する願掛けも同様であった。

\*28 彼らは、このビラを破ったり踏んだりするなど邪険に扱うことを、アッラーの怒りを買う行為として固く禁している。

\*29 護符を使用する村人が受けた津波被害の程度は、人によりさまざまである。なかにはまったく被害のなかった者もいた。

\*30 タツワは、宣教を意味するアラビア語に由来するマレー語で、イスラーム復興運動をさす (Vigara 1984: 213)。タイにおいても同様の意味で用いられている。

\*31 本稿では紙幅の都合上、差異をめぐる両者の関係性についてくわしく触れることはできない。一例としてタブリーグの中心メンバーについて見ると、彼らがアッラーへの願掛けやビラを護符として用いる村人を直接、批判することはほとんどなかった。しかし一部の公的宗教指導者を除く中心メンバーは、願が成就した際にアッラーへの御礼として行われる供宴に参加していない。

\*32 アンダマン海沿岸に共通するグローバル化現象のひとつに観光化がある。トラン県では津波後、復興支援の一環として政府の後押しのもと、強力で推し進められている。M村では、村の前浜が観光資源としての価値を見出され、村内にバンガローが建設されたり、道路が舗装化されたりするなど、観光開発が急速に進んでいる。

\*33 先に触れたように、M村には、東南アジア諸国を中心とする国外から宣教団が訪れていた。また、それとは逆に、東南アジア域内ではあるが、国外に宣教に出る村人もいる。このように、タブリーグを通じた村人と海外のムスリムとの交流も進んでいた。

\*34 たとえば、政府は、タブリーグの年次集会 (TC) の会場を提供したり (Sawarni 1988: 230)、ムスリムによる反政府武装闘争が続く深南部でタブリーグが宣教活動を行うことを許可したり (Bramm 2006) している。

#### ◎参考文献

小河久志 (二〇〇九) 「イスラーム教育の変容と多様化する宗教実践——タイ南部ムスリム村落の事例から」『イスラーム世

界」七二号、二七—六〇頁。

——(二〇一〇)「分断するコミュニティ——タイ南部津波被災地の復興プロセス」林勲男編『自然災害と復興支援』みんぱく実践人類学シリーズ九、明石書店、一八一—二〇一頁。

——(近刊)「タイで広がるイスラーム復興運動——南部トランにおけるタブリーギー・ジャマーアトとムスリム社会」床呂郁哉・福島康博編『東南アジアのイスラーム』(ISEAプロジェクト成果論文集) 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。

オリヴァー・スミス、アンソニー／ホフマン、スザンナ・M(二〇〇六)「序論：災害の人類学的研究の意義」ホフマン、スザンナ・M／オリヴァー・スミス、アンソニー編著『災害の人類学——カタストロフィと文化』若林佳史訳、明石書店、七—二八頁。

オリヴァー・スミス、アンソニー(二〇〇六)「災害の理論的考察：自然、力、文化」ホフマン、スザンナ・M／オリヴァー・スミス、アンソニー編著『災害の人類学——カタストロフィと文化』若林佳史訳、明石書店、二九—五五頁。

斎藤千恵(二〇〇九)「死と破壊から始まる観光——アチェにおけるインド洋津波の解釈」『鈴鹿国際大学紀要 Campana』一五号、四五—六三頁。

杉本良男(二〇〇七)「天然聖トマス霊験記」国立民族学博物館研究報告』三二巻三三号、三〇五—四一七頁。

中澤政樹(一九八八)「JEMAAH TABLIGH——マレー・イスラム原理主義運動試論」『マレーシア社会論集』一号、七三—一〇六頁。

西井涼子(二〇〇一)『死をめぐる実践宗教——南タイのムスリム・仏教徒関係へのパースペクティヴ』世界思想社。

三尾裕子(二〇〇四)「祀る」関一敏・大塚和夫編『宗教学人類学入門』弘文堂、一三六—一四八頁。

Ali, Jan (2003) Islamic Revivalism: The Case of the Tablighi Jamaat. *Journal of Muslim Minority Affairs* 23 (1) : 173-181.

Anuman Rajadon (1961) *The Nature and Development of the Thai Language*. Bangkok: The Fine Arts Department.

Asian Disaster Preparedness Center (2006) *The Economic Impact of the 26 December 2004 Earthquake & Indian Ocean Tsunami in Thailand*. Pathumthani: Asian Disaster Preparedness Center.

Braam, Ernesto (2006) 'Travelling with the Tablighi Jamaat in South Thailand'. *ISIM Review* 17: 42-43.

Burr, Angela (1988) 'The Relationship Between Muslim Peasant and Urban Religion in Songkhla'. Andrew Forbes (ed.), *The Muslims of Thailand Vol.1: Historical and Cultural Studies*. Bihar: Centre for Southeast Asian Studies, pp.123-134.

Krom Kansatsana (2000) *Raingun Kansatsana Pracam Pi Photo*. So.2542, Bangkok: Krom Kansatsana.

Liang Yongjia (2008) 'Between Science and Religion: An Astrological Interpretation of the Asian Tsunami in India'. *Asian Journal of Social Science* 36: 234-249.

Masud, Mohammad K. (2000) Preface. In Mohammad Khalid M. (ed.), *Travelers in Faith: Studies of the Tablighi Jamaat as a Transnational Islamic Movement for Faith Renewal*. Leiden:

Brill, pp.viii.

Nagata, Judith (1984) *The Reflowering of Malaysian Islam: Modern Religious Radicals and Their Roots*. Vancouver: University of British Columbia Press.

Ogawa, Hisashi (2008) Dynamism of Coexistence Between Islam and Folk Religion: A Case Study of one Southern Thai Muslim Village under the Influence of Global Islamic Movement. Paper presented at the International Conference on "Language, Literary Works and Culture in ASEAN: Diversity in the Unity" at Bangkok, Thailand, August 4-5.

Omar Farouk Bajunid (1999) The Muslims in Thailand: A Review. *Tonni Ajia Kenkyu* (『東南アジア研究』) 37 (2) : 210-234.

Saowani Cinnuat (1988) *Klann Chatphan: Chao Thai Mutal-im*. Bangkok: Kongthun Sangaruchiraamphon.

(ムエントキエム)

<http://www.kurusampan.com/main/content.php?page=content&category=13&id=24> (11010年八月二十八日閲覧)

(おがわ・ヒサシ)／国立民族学博物館)